

本号のテーマ：「晩学について」

若かりし頃、外国語の素養としてひとり英語だけに依拠することへの反逆から英語の天敵(?)であるフランス語に数年没頭したことがあります。日本語・英語・フランス語の、そしてそれらが紡ぎ出す三種の言語的自我が、自分自身の中にいかに鼎立(ていりつ)するだろうか、という愉快的期待感もありました。フランス語の手ほどきをいただいた先生方の一人に松下和則先生がいらっしゃいました。松下先生は長らく仏語辞書の編纂や名作の翻訳を手掛けられてフランス政府から教育勲章を授与されるほどの稀代の碩学であり江戸っ子堅気の「きっぷのいい」方でした。先生と一緒に読んだヴィクトール・ユゴーやシャトー・ブリアンはたいそう面白く、フランス流の含蓄に富む先生の講義は私の心のオアシスでした。

ある時、授業の中で *opsimathe* (オプシマット) という単語が出てきた時、先生が「ああ、これは私のことだよ」とニコニコしながらおっしゃられていました。今手元の辞書で調べてみると…

Personne ayant un apprentissage tardif, durant la vieillesse. とあって、「遅く老年期であっても物事を習う人」という意味です。欧州にはこういう感覚を明確に表す単語があるのだな、と少し感動したのを覚えています。

ごく最近になって *opsimathe* という単語があったのを再び思い出して日本語では何と訳されるのだろう調べてみました。「晩学の人」というそうです。個人的にはこの「晩」はいかにも人生の終盤を表わすような、この世に生きた証を必死に残すような陰影的含意が感じられて仕方ありません。この「晩」はもっと早い時期、人生の「午後」あたりから守備範囲にしていいのではと思います。学校を卒業してから随分久しくとも、ふと何かに惹かれ本腰を入れてそれを学び追求・習得しようとする心は実に良いものです。まあ、それほど力を込めずとも買ったまま長らく読まないでいた本を何かの拍子に手に取ってみることも立派な「晩学」です。



「書物との交わりは…老年にあっても、孤独にあっても、私を慰めてくれる」…これはフランス版「徒然草」とも言われているモンテーニュの「エッセー」(「随想録」)の言葉です。

ところが最近、吉田兼好「徒然草」で次のような一節に出くわしました。

「大方、よろづのしわざは止めて、暇（いとま）あるこそ、めやすく、あらまほしけれ」
（(年を取ったら) 大体、いろいろな行いはやめて暇であることが見てくれがよく望ましい）

「もとより、望むことなくして止まんは、第一のことなり」（第 151 段）

（最初から、見たい知りたいという望みを持たずにすませられるのならそれが一番だ）

各時代の厳しい吟味(tests of time)をすべてクリアして今に伝わる和風エスプリ満載の名著「徒然草」。これをものした敬愛する兼好先生が opsimathe について否定的な物言いをなさる。

「こはいかに、かかるようやはある」（これはどうしたことか、こんなことがあるだろうか、いやない）と叫びたくなりました。何か仔細があるに違いない、と。

この愕然がまだ心のどこかにしこりとなっていたある日、赤本をめくっていると今度はホッとする一文を発見しました。

「高適五十始為詩、為少陵所推」

（高適（こうせき）は 50 歳になってから詩を作り始めて、杜甫から推奨されるまでになった）

「功深力至、無早晚也」（「鶴林玉露」より）

（努力してその道で秀でるのに年齢の早い遅いは関係ない）

まさに晩学礼賛です。どうやら opsimathe に関しては大陸側がおおむね肯定的なようです。

現在、働き方改革や AI 技術の導入等で余暇が増える傾向にあります。また健康寿命の伸びで人生という見地からも余暇も得られるようになりました。このますます増える余暇と晩学とはまさに相思相愛。この相愛の念は今後ますます深まることは必至です。ここま



こうして書いてきてみると、ここでひとつの気づきに至ります。世の中に「再教育」や「リカレント教育」など中途の教育を意味する用語はありますがすべては行政側のしつらえた社会経済学的ニュアンスに満ちた用語です。一方で「晩学」は自由・自発的で必ずしも功利のニュアンスを持たない言葉です。ここが実に良いですね。晩学の発露はすべて各人にあります。そして個人個人の晩学の芽は今や各種科学技術の助けによって容易に成長開花しやすくなっています。佐久に晩学の気風が満ち溢れ、皆様が思い思いのスタイル・流儀でご自身の興味を楽しく追求されることを心から願っております。